

社説

厚相が水俣に行く

園田直厚生大臣はきょう水俣に行つて、水俣病問題について市当局・市民と話し合

い、湯の鬼のリハビリテーション・センターを訪れて、水俣病の患者を慰問する。水俣病問題については、きょうという日は、一つのエポックを画する日である、といつていい。

二十日、本社の熊本政治部長とのインタビューの質疑、園田厚相は

「政府見解はいつ出すのか」という問いに答えて

「水俣病だけの結論ならいまずぐ出せる。

しかし、十数年放置されたものを私が取り上げるのには何かきつかけがある。そこで新潟県の第二水俣病と同時に出新しいと思つてい

る。私としては二十日以前に出すつもりだったが、第二水俣病の所轄官庁である科学技術庁がロケット実験で忙しかつたので、結論を出すのは来週中にならう。これは間違ひのない線だ」と言つてゐる。

「十数年放置されていたもの」とは水俣病問題のことである。

「放置されていた」のなら、「放置していた」ものがある。放置していたのは「国」であ

る。放置されていたというのは「放置されるべきでなかつた」ことを意味する。放置すべきでなかつたものを放置していた責任は国が負うべきだ、ということこそを意味する。

しかし、「十数年放置されていたものを私が取り上げるのには」といふとき、放置していたものは、「私の前任者たち」ということになる。そこで、「私の前任者たちが放置していたものを私」が取り上げるのは（前任者たちを踏みつけにすることであるから）何かきつかけがある——ということになる。

そのきつかけが新潟県の第二水俣病である、ということになる。

しかし、それなら、もし第二水俣病が出なかつたならば、きつかけはないことになり、水俣病問題は水俣に取り上げられないことになる、わけであつたのであろうか。

風当たりは強くて

放置しておいてはならないものを、放置していたのは「国」である。たとえ「私」が取り上げるにしても、それは「国」が放置すべからざるものを放置していたことを、悪かつたと反省して取り上げることである。悪かつ

たと反省して取り上げるのなら、きつかけは不要である。すぐ改むべきである。

「水俣病だけの結論ならいまずぐ出せる」というのなら、いまずぐ出してほしい。

二十日、寺本知事は県庁で園田厚相に水俣病に関する陳情書を手渡したが、その第一項は、水俣病に対する政府見解を早急に発表してほしい、というのであつた。

結論を出すのが遅れたのは、二十日以前に出すつもりであつたのが、第二水俣病所轄の科学技術庁がロケット実験で忙しかつたから遅れたということであるようだ。それが事実であるとしても、また何かの事情で科学技術

庁の方の結論が遅れるということが全くないとは限らない。水俣病の方がそれにお付き合ひをさせられる理由はない。まして、万一にもそんなことはあるまいとは思つが、第二水俣病に対する科学技術庁の結論が、明確さを欠く形で出されるというような場合、水俣病に對するそれまでがお付き合ひさせられる、といふようなことが、絶対にあつてはならない。

「いろいろ圧力があると聞いているが……」という問いに対して厚相は

「風当たりは強い。いろいろとやりにくかつた。スタンдрブレッドともいわれている」という意味の答えをしている。もつ、こ

まで来たら、そういう風当たりは突つ切つてやつてもらいたい。スタンдрブレッドうんぬんの拙評など気にすることはいらぬ。

厚相への期待

寺本知事の陳情書に記された要項は、大体的にインタビューの中で答へられている。患者救済の制度と紛争処理の制度の立法化、という要項に対しては、二つの法律を次の国会に提出する、といつており、そのうち紛争処理機関としては、政治的干渉を受けないために、総理府なんかの中に設置することはよして、公取委のような中立で独立した機関の設置を考

えている、といつてゐる。大企業が片相手である紛争である場合、財界につながら政治的圧迫・干渉が、紛争処理機関に加えられる危険は当然あるし、黒い罫の誘惑の手が伸ばされる可能性も当然ある。それらをねのける

半然たる仲裁機関がつくれねばならぬと、またいうまでもない。

ただ、厚相の話の中で、患者救済に要する費用の分担について、国が二、企業が八の割り合ひを考へていたが、企業側の強い反発を受けていまでは二分の一ずつに歩み寄つてゐる、という発言があつてゐる。また法律案の提出もないうちに、すでにそのような企業側

の強い反発があつて、国側が後退を余儀なくせしめられてゐるのである。今後の立法、あるいは法律ができるまでの暫定措置を決める過程で、企業側の、あるいは企業側と振闘を共にする連帯者などの政府内部機関の、いろいろとやりにくく、くさせる力が、園田厚相に加えられることは十分に察知される。

われわれは園田厚相の就任以来の果敢な発言と行動に万端の信頼と支持を寄せるものである。それは、公害関係の官庁や企業の責任回避を苦々しく思つてゐた国民全部がすがすがしい気持ちにさせたといつていい。

いまや、水俣病問題は解決に向かつて着々とその歩を進めている感じがある。しかし、それはまだたんだんなる道であるとはいひがたい。

そして、それを解決に向かつて推し進めるために、園田厚相は依然として一つの強い力ナメである。

きょう、「十数年放置されていた」水俣病患者が、放置していた「国」の責任者としての園田厚相と初の対面をするという日、われわれの期待は大きく氏の今後にかけられてゐる。熊本諸の連じる園田厚相に県民すべてが言いたいことはこうである。

「園田さん、イチヂョ頼みますバイ」。